研修生だより　№11　　5／11～5／16

社会福祉法人建昌福祉会　帖佐すずらん保育園　福冨

日付	時間	活動内容 ＆ 場所
5月11日 （月）	13:00 15:00	Steveston (museum and Georgia cannery national historic site)見学 Coal Harbour community center kids soccer Program 見学・体験
5月13日 （水）	11:00	Science World　見学
5月14日 （木）	10:45 11:30 15:30	Parkgate community centre 見学 Langara college 見学＆学生インタビュー Coal Harbour community center kids soccer Program　ボランティア・体験
5月15日 （金）	12:00	Education Assistant の方へのインタビュー
5月16日 （土）	11:00	日系 Cultural Centre 説明見学・質疑応答

バンクーバーでの研修２週目。今週は Steveston を訪れ、日系移民の歴史に触れることからスタートしました。施設研修ではありませんが、多文化共生の視点では非常に重要な体験をすることができました。現在のバンクーバーの寛容で開かれた社会の構築は、多様な背景を持つ人々が集まり、それぞれが厳しい環境の中で働き、生活を築いてきた移民の方たちの弛まぬ努力の延長線上にあることを理解できた気がします。一方で、戦時中の日系人の強制移動などを考えると、共生の難しさ、弱さも同時に感じます。歴史を学ぶことは、今の社会がどれほど多くの人々の苦労と希望の積み重ねで成り立っているかを知ることであり、私たちが未来に向けてどのような共生社会を築くべきかを改めて考える必要があると感じました。

そんなバンクーバー２週目の研修では、各 Cultural Centre（日系）、幼児教育にかかわる施設（科学館等）・Community Center kids soccer Program ボランティア参加、ECE（Early Childhood Educator）資格取得中の学生インタビュー、Education Assistant として働いている方のインタビュー等を実施しました。

ナカムラさんが指導するサッカープログラムを見学し、まず心を動かされたのは、ここが単なるスポーツ教室ではなく、親子が一緒に楽しみながらつながりを育む温かな場であるという点でした。技術指導よりも、ボールを介して笑い合い、関わり合う時間が大切にされており、その雰囲気は家庭でも学校でもない“第三の居場所”としてのコミュニティセンターの役割を強く示していました。多文化の子どもたちが自然に混ざり合い、一緒に活動する姿には、バンクーバーという街に根づく多様性の文化がそのまま表れているように感じます。

ナカムラ氏（中央）と学生ボラと一緒に

さらに印象的だったのは、学生ボランティアの存在です。彼らはこのプログラムの出身者であり、かつて自分が楽しんだ場を今度は支える側として戻ってきていると聞きました。地域の中で育った子どもが、成長して再びコミュニティに貢献する循環が自然に生まれていることに、とても感動を覚えました。こうした「世代を越えたつながり」は、日本の地域づくりにおいても大きなヒントを与えてくれるものだと感じます。

私自身もボランティアとして子どもたちと関わり、最初は言葉の壁に戸惑いながらも、ボールを追いかけるうちに少しずつ距離が縮まり、最後にはハイタッチを交わせるほどの関係が生まれました。言葉が通じなくても、遊びやスポーツを通して心が通い合う瞬間があることを、子どもたちが教えてくれたように感じます。

バンクーバーで ECE（Early Childhood Educator）資格取得中のディジュレ氏に話を聞き、BC 州の幼児教育が大切にしている理念について知ることができました。学生は複数の実習先で多様な子どもや家庭と関わり、その経験を通して保育者としての視点を少しずつ育てている様子が印

象的でした。そこには、BC 州が大切にする「子どもを尊重する文化」が自然に根づいており、学びの中心に“関係性”を置く姿勢が強く感じられた。

ディジュレ氏（右）と一緒に

特にディジュレ氏が語っていた、保育者が大切にすべきことの学びとして「忍耐力」「非審判的な態度」「子どもの受容」という言葉があり、多文化社会で子どもと向き合う上で欠かせない専門性の高い言葉だと感じました。文化や言語、家庭背景が異なる子どもたちを前に、保育者が一方的に価値観を押しつけるのではなく、まず理解しようとする姿勢を持つこと。その上で、子どものペースや感情を丁寧に受け止めることが、BC 州の保育者養成の根幹にあるのだと感じました。

また、ECE を取得した後に実務経験を積み、必要に応じて Special Needs や Infant-Toddler などの専門資格を追加していく仕組みがあり、保育者自身も学び続ける存在であるという前提に立っている点に共感しました。子どもの成長に寄り添うように、保育者もまた成長し続けるという文化を象徴しているように思います。

BC 州の保育は、対話と探究を大切にし、子どもの興味や声を丁寧に拾いながら共に学びをつくる姿勢が根づいていると思います。その理念に触れたことで、自分自身の保育観についても、子どもとの関わりをより深く見つめ直すきっかけとなりました。

バンクーバーで Education Assistant（EA）の方にインタビューを行い、支援の在り方だけでなく、働き方そのものにも大きな学びがありました。特に印象的だったのは、EA には固定配置だけでなく、欠員が出た学校に呼ばれて勤務する“オンコール”という仕組みも存在するという点です。朝に連絡を受け、その日の状況に応じて小・中・高のどこへでも向かうという働き方は、日本ではあまり見られず、地域全体で支援を補い合う柔軟な体制が整っていることに驚きました。こうした仕組みが、学校間の支援の質を一定に保つ役割を果たしていると感じます。

インタビューの中で EA の方は、学校が変わっても「まずはその子を理解しようとする姿勢はどこでも同じ」だと話されていました。多文化・多言語の人々が共に暮らすバンクーバーでは、文化や背景の違いが日常の一部として受け入れられておりその価値観が、障がいや発達特性のある子どもへの支援にも自然につながっているという言葉が印象に残っています。違いを前提とした社会だからこそ、子どもの特性も“特別なもの”ではなく、多様性の一つとして受け止められているのだと感じました。

また、支援は特別な場に分けるのではなく、子どもがクラスの一員として安心して過ごせるように調整されている点も心に残りました。一方で、発達に違いがある中でどのように支援を進めていくかについては難しさもあると語られ、日本と同じ課題を抱えていることも分かりました。文化や制度が異なっても、子ども一人ひとりに向き合う難しさは共通しているのだと改めて感じ

す。今回のインタビューを通して、多文化社会が育む価値観と柔軟な支援体制が、インクルーシブ教育を支えていることを深く理解する機会となりました。

バーナビーの Nikkei National Museum & Cultural Centre を訪れ、日系カナダ人が歩んできた長い歴史に深い敬意を感じました。移住の希望を胸にこの地へ渡った人々は、強制移住や財産没収といった過酷な経験を経ながらも、再びコミュニティを築き、多文化社会の中で自らの文化を守り続けてきたそうです。その強さは、展示を通して重みをもって伝わってきました。

日本語での掲示物や子どもたちの作品

施設内には、日本語継承のための学校も併設されており、子どもたちが一生懸命に学ぶ姿が印象に残りました。日本語を学ぶことは単なる言語習得ではなく、家族の歴史や文化への誇りを受け継ぐことだと思います。多文化社会で育つ子どもたちにとって、自分のルーツを理解し、複数の文化を行き来できる力は、これからの社会を生きる大きな支えになると感じました。

過去の事実をしっかりと伝えながら、未来の世代に文化と歴史を手渡していくこの場所は、日系コミュニティそのものを象徴しているのではないでしょうか。今回の訪問は、異なる文化の中で生きる人々の努力と誇りに触れ、自分自身の視野を広げてくれる貴重な経験となりました。

バンクーバー研修の総括として、この国が多様な文化や人種の人々によって築かれてきた歴史を、現場での体験を通して強く実感しました。幼児教育の施設やコミュニティセンターでは、子どもや家族の背景を尊重し、違いを自然に受け入れる姿勢が当たり前のように根づいており、その柔軟さと開かれた空気に深く感動しました。特に、文化や言語の違いを「問題」ではなく「資源」としている姿勢には、教育者として学ぶべき点が多かったように感じます。

一方で、この学びをそのまま日本に持ち帰ることの難しさも痛感しています。日本は長い歴史の中で同じ民族の中で培ってきた社会の中で、移民受け入れへの慎重さや外国人への偏見など、社会の深いところにある課題は根強いと思います。ニュースで耳にする差別的な事案もある中、多文化共生が簡単に進むとは思えず、「どうやって変わっていくべきか？」という疑問が湧くのも正直なところです。

しかし同時に、日本の中でも外国にルーツを持つ子どもが増え、地域社会の中で多文化化が確実に進んでいる現実もあるのではないかと思います。制度がすぐに変わらなくても、幼児教育の現場での小さな実践が、未来の価値観を育てるきっかけにはなるのではないかと感じています。多文化共生は制度だけでなく、人から始まると思いますし、今回の経験を通してより深くそれが理解できたように思います。カナダの内容をそのまま実践せずに、日本に合わせてどう“翻訳”していくかを考えることが、これからの課題であり、私自身の役割でもあると感じました。

その他、写真をいくつかピックアップ！！

言葉の壁も、スポーツは超える！（Coal Harbour community center kids Soccer Program）

「あなたのおかげで私がいる」ことを意味した「お蔭様で」の書道（Steveston museum）

子どもが興味関心を持てるよう、上手に引き出す内容（Science World）

日本語のお便り掲示（Nikkei National Museum & Cultural Centre）

バンクーバー文化の勉強！！part.2

歴史も面白い！自然は雄大！バンクーバーの様々なものが、学びを深めてくれました！